八犬傳九輯桂寛評

九十二回ヨリ
百二回マテ

帝国図書館
イ曽4
600
8冊3

門 イ 曹 4
號 600
卷 843

乙未夏五月七日自伊勢松坂友人小津桂窓子
着到七月十四日答當否先但応干其需已矣 彡罪

八犬傳九輯

瓦評

龍澤文庫

八犬傳九輯 巻評

第九十四巻

龍澤文庫

しかるに漢文にくらいさらあざとく文に勢ひあるこ
眼おどろくことく一こハ評する暇あらぬ程にてさのみいはん
それ全評者の筆のおよはざるこ
ちこ篇をつらひなるて起り尾となるとゝ文句ハ例のこと
なるゝ妙文なることと感心こ
復讐をおかゝ戌ると戌の字をきいれる一寸看发
の筆ゝ付ぬことなぐらくんを用ひられるの
小文吾英助ゝ掛蕩ゝいてるるさかもいとめ侍こ

此の評を看功者の所為と当今知る評者ハ是くるゝ
実ハ作者の知音なるゝ

戌ノ字なるとハ鑿金説ハ仮ゝ作者を資けられる筆ゝ化とも理あり甘心ゝ

神号の故名くん出されしうり
作者の肺肝を思ふに後世やそうけん孫三郎

古の俳も佳

し所歟又分大名く場合の名のいとまおき所うれい神号
この指しうの故かきあれらふ元妙や
縁連腰刀ゑを掛るし付連しみ時不ちど云文句いとめ
つらきくきやるて元妙
十三丁オ六行メ叫ひも呆ぴにといふまの板えの彫くづうて
毛皆う猛虎と戦のさまも妙この干後猛虎く首をめつふ
縁連、打しる故句新奇之
毛皆う亡又の法号を付けるう小幅をいくしるう田向く所
なと着皮も爲濃こおよひぬかくいさまきゆ中も考み
の衣情をかけれる依者く用心のこるところ元感

古の俳も佳
よくもこれられうれ心

心すくあかく文
ようまぬあの大川と云ものてぐやく大四の条論ちど云文句も
例く妙文
定正出陣く庭守如う兵論元妙之定正暗将守如い
太閤ちる事の故をよく書とられるまの
事の勢ものるふまて云くく文句勢ありて出陣のさまめくみる
くく例の妙文を
九十二回現八大角う樹立の中う出形く庭小文吾荘助
う掛わらの中う出現の所と照対ちるべし元ち後回し
勢ちるふ故ちるふ久られる妙中く妙この感心ふ坊ノ

二

住

定正の塊堂道節が射しる所白丸妙之これらいと雖
俗の所ちらへきをいと多くみくかきおされうるの之りと感心ふ
かい塊の子後回の手けし妙之作者の若心顕れうり
丸御そく立折よの乃奈ゆ乃丸急のおうふ所とあくば
された婦女ふいたぜと定正を射おうして使くいせぬるぞと
はりふくあづくしうて評のこうふおづる之
定正が嗟嘆して一品の感之と之ことと後悔のところ乃丸ば
まあることうて実とせれたり
有種と軍令を破らして一役つけられるも例く人形わ
意く役まはりぬけめたくして妙之軍令と事い後回

住評

よくも化志の苦心を遂徹せれ
よう実ま半評の
如ちろひたく

機変の論ハ化志のまに面目
志の評を忘おそまよ
ろ宜へり

ふ引られとれふ丸ふ細ふく例くぬけめたぎは作之感心之
轎ふの話白高彩奇ニふ妙く妙之一條の満川を てくく
大士の回答歌へはくる話白るといとるうきことるく
これらのとうる丸作とあ文評すと筆紙おうあり
孝嗣と乃節の回答も丸妙とふ妙くもめるめるし毛理
乃節ハふりくとおれるふいあねくもどかれる文神その
さはを乃ろこと
九十四回機変の論丸妙ふ尚附人事とまるあることうて
万世亀鑑とふつ
乃節孝嗣ふ回貴重十分ろくまづよし馬をこ

佳

佳伴

箭を射かくる事ゝ敵向かひ合ふ椿樓櫓の節ゝ敵向ひ合ふ
いとゝを用ひらるゝあれ
信乃五十子火攻ゝ焼死ひ一番姫出て
看病ゝしいき役者ゝ
きてゝ看病ゝやゝと夢の加る場ゝ
孫重ゝ席ゝ七大子の気性ゝ
て九十二回分種ゝ
あぐゝいとまあゝ
神機妙算とゝ
金米銭を万姓ゝ

ゝの照応いと遠けれ共も如つきのなぐゝんをまくもえらんとうもとゝ如ハ照応応と求めて綱ゝゝゝまあゝ
偶然ゝ

評ゝ
細工巧者の
ゝゝ

加筆ゝ

兵粮蔵ゝ白壁土ゝ救行ゝ文字を
五回滝田城攻ゝ
妙ゝ
九十九回信乃ゝ前回ゝ白壁ゝ文字を
此回ゝ乃ゝ
重ゝ用ゝ孫重ゝ
仁義礼智八行ゝ文字を文ゝ
ゝかゝひていとめてゝ
あゝ肝文ゝ妙ゝ
外道二八大士ゝ

佳評

八大士の罪すべきなるべし。そこで煙をもれて死ぬるはかれらが事自然出来ることなく一事去全ていとめて晋五の事に付あるべし。山の悟古の情を加れば例のぬるうあき作者のよくいうる第十條兄弟の敵をこの所に道節うつされるも首尾れけひて孫重　ひくまひとよのことなるしゆえ説いされるかことふかきとかさうかき文の勢さるをいとやすとこみ　いまれら尤感心ふかく定正の塊をうあ首級どもをかりて鄙陳の浪いと快し代獄陳の浪定正が首を塊ひよ久てもとう看友八十條兄弟の一件に京くしとあひ長ら晋みら首をきらして

佳評

その塊の代を補られるはいとめてくしく次国志は二大士の事に付義事あるものこうして次堂志のことを一寸説いて事に為志を入せて看友のおちつく抜せられぬるなり兄又弟に師しるあめ山一件のことくかるる文勢の中てかきとうがき文言これらに用心あれば作者の立抜郭ぬるうあき妙作あるれ大士はかるるたひの中にも舊文をのすれぬ義言何ら事十分に妙といふべし

孝嗣の志ぶ演きて嘆息に涙もめ入ることし　塊を拭うて定正に志めすところ定正目ちてよくも入ず

佳評

かゝる混雑中ゝ去の賊男女を看首のゝ多仮去の用心容易のるまあ生さらい格まへ力を入れて評あり　仮去いるゝ仮去さちを

とかゝれるもまことふ実事さもいひつゝこのあらの文勢すべて実をせまれり

おゞ月船出の枯首の又役立てるも積悪ゝ報とゝへく

ゝ車自然ゝ出てることくゝまて仮意も妙ゝ

九十六四　二丁ウ二行メ「」を誤字ゝ

四丁ウ十一行メ仮法ゝ「ゝ」ゝ「ゝ」を誤字ゝ

孝嗣を又も定正が忌むことゝ首尾よくとりて前段の意ゝいとよく呉ゝ世りこゝりて又も道節の策ひできのことを説ゝゝて定正の頭痛屋ることをいまれゝハ妙ゝ道節の矢ゝ復讐の恨の矢ゝて事ゝ事ゝ用ゝ

甲を用ゝ

佳評

首ゝかゝられゝるれゝこゝふて頭痛の事をいまれゝ呉ゝてハ

貫目ゝ重ゝこゝの意ゝ妙ゝ

ゝ大和尚の事をいゝよゝ呉ゝて、大と看皮よおもれ世

ゝられゝるもおゝゝこの名言の行ハ大角が玉ゝの恨の

恨意ゝ重ゝ　すでゝこの事ハ仮去の本文ゝ原のめゝされ

ゝれゝ弥ゝハおゝばぬゝことゝ重ゝ　又この本文を系ゝて

一寸離衣のゝをとゝれゝ上も弥せゝごゝく　すゝて

ぬゝめゝき仮去の用心孫重ゝ

ゝ大和尚の名言の行ハよゝくも和ひゝられゝるまゝふゝ

ゝそものをいひてハ妙ゝあゝ仮去の苦心いちゝるゝして

佳評　兄省文の法ゝされゝを文外ゝ敬ゝ之ありといゝ

めをつくへき肝文なり

、大和尚の念佛の行の序に世の念佛者の事を論彼せられしいとめてたし感心なり尚附多識新する

思信等の企及へき事にあらさる的論とゝ云へく

うへすくも感服ゝ

いつくの多自然藷の夢より生きたる文事を

一物して仏の妙文

夏初の病事を説いて有種を八犬子と日はさせ

れ妙教句も妙之お高の恨なきはやりる教句すて

ことさら妙ゝ

妙覺五大記本有三千の妙評あり

ゝ八別に下る

深ゝ考へ

物

狗児佛性の問大ゝその意あり〻こハ新意の

ことをいまれゝ考へべし　尤妙く

九十七回再里見家の事を説いてされゝ猶尤たゝさる

へき所多へきをいとやすくことみゝを説いてされゝ例く

妙之義実に生死いとと看皮のあやゝみ居ゝとゝ

未有命のことをとれて旦薩埵の深くせられる長

め仏ゝ云ふ法解ゝ云ハ知りの仏ゝ久すゝ

多くまれゝ実ゝ法名をゝ多くあひあはされる

ものゝ形何から何まて一ツもぬりめ形き多能妙ゝいゝん

もあまりあり

よくも入られる
多佳評

義成の事をとれる文も貫目ありて八犬士が主とあふく
へき名ありることいと似つかはしてまた又妙きの文章なる
をもつめすきこうしてをこしくかれる看皮ぶさみ
ふおすふまじきことこれい事雑儀のことりて犬士のことを看
皮ハよく知れと里見の力ありて生死存亡を志人なり
仮者も度々説出さること〻何さることハ自註もいれ
しうきこうらハ仮者〻若心看皮の名所ハ十倍
の雑儀あり只あまき感するハすきこうしを物語を
事を省き元をつまやりてわづかの丁数にかきとれ
しる筆力を妙〻又妙と賞するなり

素茂骨肉ノ情ヲ
オモハズナケクコモ
ナリシテ金銀ヲ集
テ逐電ノ匿紙
情ヲヨクウカチ
エラレタリ

この如く評ヲ云く
逆説あり
この篇ホメ志
してアンセ

佳評

話分両頭のところ事を一物して雲泥の遠ある物語
をときいてきれしる奇妙自在の作意とふ〻しかのこと
く雲泥の遠ある物語を坂四ハ泥水のごとくあふされ
しるも妙〻

九十八回盗人の従者〻賊巣にかりて〻〻財句いと耳
めはらく〻ありしう〻

素茂ノ従者卒八ノ素茂をあざむきてちくてんする所
主従盗人の実情さもあるべきことなる〻〻盗人の従者ノ盗
人のものをぬすみてきることとられきてアンあさら更
新奇の新句とふべく孫重〻

水滸九八年ヘテノ再會ナリ程ナキ再會ヲ新奇

佳評ニて

唐山の俗語稗史を見ぬ人々これらの評に及ひ〻〻ほ〻ほ〻ほ〻とふへし

素盞ヶ嶽八岳作と再會〻〻後ろ姿を出ておのうし
この話の為に辭代こと新あまと夫とい話大こ哭こて伊吹
山の賊巢被滅の事ハ廿回いとちうしされハ新八岳作
ゲこの絨巢〻あぐんこと看皮ハおのれもうしこと業が
まて新奇といふへく妙〻
小絨の詞ひそも伊吹もゑ〻ぶ〻てとふこと一すしる
こと〻なる〻唐土の小說の詞を大和詞まるれるあらへ
迫ひよゆうあり詞ってちくちゑ〻きるのが
玉を盜で玉をといれ城をぬすみて城主といれる〻
〻編ハ盜絨のうへハ實〻あるつき編まて絨巢をもくも

さの反對をもくも見出れ
ら意〻なる〻〻〻

實〻〻〻るものとふて
いられ帝つむ二郎とわん作とわん八の物語を素盞ヶ
ひそうと立所する限ハ第七十六回岳飛の酒ちん二の絨巢〻
宿する限と邪正の反對とふへし事ハ同一拙ちる
事まて話をもくくもくくハ例のことなるゆゑ感心なり
素盞ヶ嶽の絨をさしこころす限まつもくてよく山刀を一ふりハ
伊ゑさしとあるも用心あり反絨の首を入ちゑてる事
なるハ〻ものゆゑこれらいいさ〻の事なるゆゑ九作とあり
まゆき事にて却の事感心せりやみまはぬ古話
の為配とある詞をとも宮まれり素盞ヶ嶽の為配ヶ

九

佳評

言評を精妙なり

作者の手配まことに妙なり妙とふべし
天まもやがてあらはれ出でんとせざるうちといとめづら
しきを言ひ又芭蕉を植えうゑ絨情さまあり
すつて什一度絨茶よ絨の中うるる話句赤堂の話
句をうて実を新奇とふべく孫重く
九十九回素波ハ盗絨と夫を一城の主とすとふ話句
を客易の事なれこの作者のかかる話句を企
る作者海内に雄りあるむいづまた珍理なる話句もある
へき所なれ節珍理なることなく事自然出るうちに
わつかなることより話りきれるハ尤妙と妙なり素波も

神水 三人ヲ多クシテ久ル陰徳アレハ悪人ノ立身ニ有コレラヲ コトハラレタルモヌケメナシトイフヘシ感心コレハ作者の真面目をあらはしたるを入れて評あまりなれ

南柯爽と爽実なる事評のとり是ハ話句の立へ記なるを記をいとはん

始より一城の主なる言ハなきを自然の勢ひて一城の
主となるとふ話句まことに素かまて新奇の新奇と
ふべし
諏訪の社に一宿の度鬼の四季を素波の立きく度ハ
南柯爽の米沢山にて米ハ木魂の四季を実度ハ似る
事なるを話ハ雪泥の遠と大と話をうへられる例の
作者の妙計とふへく妙と又妙
こゝにいふまことあり玉面嬢といふものあるてその訳
を詳に世れ文芸ふ後四に分ひるべし 五葉ハ文ふ
いまゝ玉梓の霊鬼にあらざるとされとも玉梓が

玉面嬢の疑評
さもあらん句論玉梓の寃魂ゆあるべき文
玉梓の寃魂なるべきさるべしあるまじきよ
名ゆゑ思ひ出ずゆ思ひ出ずとあるべき
墨の評こまかく

住評

然魂い富山の恨より解脱の画をもそれ又いづへくも
あるべき又後回る八百比丘尼といふものもいとふ
又玉面嬢と日物いあるべきるべきあかくこの仮者の仮
意い後回の歌句九眼こうひらくし
虚の水を汲む器を紐俊の塲に神酒徳利とい
ふもおひえられるものか
この回神水のことより糸口を引いてもちまち事一結
して素義り城主となりうはる一恨い先きまも論すもく
事ゑかまいでもることなく妙中く妙まて論する筆
あまれいさのみいいを文再こ熟読感心のみ

住評

百回素義の事を義成疑ひて三家老と論定く恨いを
もひろ〜これまて義成の事を急あることいちづるくて大
恨の要目あり素義の義実義成見参く恨めをみること
くなりそれり素義使まて義成ハ思あり上巳おもひ
まどふより素義ん恋の恨邪正の実情をひるつく
ようくときつくされり
素義の一條をときくきれる意味つくく考るよりふ
山下定包と首尾をひいきれるまり八犬士の糸口ハ定包より
いてくりよりてその結ま素義とふものあれ首尾よく
うおひていとめ仕くしされもこまてらの事ハ後回を見文

ふの評鬼金剛
縦横の程あり
ふとも仕志ゑ
さまざまおのい
さりくし後局
何を素義のこと
止まるべ仕後を
尺分内なるべし

佳評

佳

して八種に評をしすべてけだし九種六冊八後快
六冊の下條なりとおもひきことおもひ迷い後快出板の上
なり又評す
朝白々白々名もよくおひまわられうこの妾二人を
素義のわがものおすとい義白い定色の玉梓の一件の
反對なり
彩八盃他の為助をこうして素義の中間のあと
入浸事自然出ることかも容易なくことなみう
まそいとかう
八百比丘尼の事は上に評ずる素義二人の妾のことこの

八百比丘尼の事
世俗その名はいはずして
虚実を知ること
ようすくさめく
三人の古事をもそ
の虚実を詳
せず他者の言面
目を四知はしさめぬ
るあるべし評ずい
さればいかゝや
他者の用意を
よくこれ有べし

佳評

尼を信　反魂香の事もしそこちまち二人の妾の事を
わすれ一条素義などの人情をすくうがちられ物の
この一件ようして里見と開戦の事をもられる事
自然のことにして別も容易なくいとの侍
者一回八幡宮の条後の事にして義通を引もすと
いふ孫計い彩奇まそいとかう神社条後の事れい
里見ことに疑あるべくあびいとめそこ
貞行直元をこの事ようて省れるも他者の用心を妙
なり
称直ら八映録ら田舎邪崇を奏ることふ又内をと

佳

佳評ここにこれを文外の旨趣と云ふ

いと耳めづらしき伝説とぞいつし一すじうることなるべし

のおはぬ文物すべて西舎の神社の所ゐることくさ

諏訪の社開戦の時楠の木の穴の怪談をもまねてこれ

なくしていまだ方々雑説ありこゝらハ妙く又妙なり

新奇の工風といふべし

百二回大風雨の時伏姫の霊とゐる事ハ標目にいはれ

たりしかと本文に何ともいまだ安房のほとりいまだ

意味ふくていとめづらし　この一段ハ第四十四の犬江

親兵衛を伏姫の霊ゐる雲雨をおゐてゐるはいと時の照

意なるべし

ユノ物ヲノ雨ヲレ
タルヨイハレタルハ
ソノサマヲ見ル如ニシテ
ヨリイタレル　仲

佳

を経ると忘れ
まかり出ひ会
されり妙評ここ

十一二なる女子を説きてそれに物ふをいざ竜伏姫の神霊

なることを何ゝはあるいはさ変して夫と看変さとされるる

妙く伏姫の神霊これまでもちること二度これそ三度なり

その度ごとに奇怪吳なるハ奇妙自在とゐふへし義通災厄の

事里見殿のいるこまりてそこなとゐふ文句をもこの世界と

説されるるいとめづらし　けせ子の一条左肝文とゐふへ

し　妙く又妙

負行也元がうけとるる連署の下知状の白紙なる

ハ方十二回なる役行者の示現そ仏教の文字のはる

時と照意なるべし

この四ちをへて評せへるあり
ちをいれぬもあるあるべ
おちまたおもも
篇末ハ別ハ
きちんとこそ
なるへし

館山の城兵ハ和る集首せられ里見方の兵ハ藤生の
城命を奪ひ出てめをおどろかせり
神佛に賽願の幡ふくなどかかれる一寸しるるなこと
実情まことある事まてらくうがちえれるの式
館山城責の段りもぬるあ形く妙くあるまハ強する
筆あまれりすべてのさま城と月あるこのごとくこ
百三四この四しおるし城責く段おそ弱せごくかと
ぬるめ形くらくかさあさんれるの式
素義の火攻をせばうこと況れるこれおそ素義の本性ら
何ゝまれ貫目なき事形ばうこうらいよく人をもちひら

きてるものうな
義実の館山の拒をきゝて八犬士の事と却ひいぶされる
所をさも何ゝくゝれるの事を伏姫の本訳の事をうつて
大山なるのことふおりふ経過まて事自然と出て妙こ
大山寺糸張の時まで義実と廟糸の意なし　住持の
川のあのうれるを説てすう廟糸のことふおひるも意
かまえ却ろし
富山の山の段源次の姫ひなりとて義実の供をあまと
つれられぬハ尤さも何ゝきこと成り静姫理あ成こ
供人をたぶれるハ就義実也訳の段の仏者の用意ろ成

一車両金の数句まことに妙之

三月ゝ陽ゝ光上の梅こゝかしこも咲そめて雪出して

中ゝ懐古の雪中をもめさるゝ文句いとゝみあそめく

〻〻

親鸞お現ゝ浪華外まことの御妙之俱見をこゝみ

とすくゝかれゝゝ文句勢あって妙之但人をこゝみとつゝし

おそれゝゝる道節始て出現の座もあれゝこゝ強すゝ及ば

ゝもこゝ作者の新工風の句あれゝ感心ゝ少よってこの

所ゝ強せり

親鸞のゝこの所ゝて一すいゝきれゝるのみゝゝいとゝゝ

ゝゝ雪雪の座ゝ着安ゝいつかゝと安堵存てんゝかゝぬ

ゝけゝたまゝゝ出現ありゝゝ一寸ゝゝ斗ゝゝ余情ゝゝ

ゝく後帰出板をゝれゝまゝけゝんやけ所の切ゝ芳流閣之

ゝ本の切とゝゝへゝ妙ゝく妙之

作者自註ゝいゝれゝゝこゝく親鸞のゝゝ後帰のゝ巻之

長文あゝへゝれゝこの所ゝて強ゝゝ印ゝいゝゝゝゝれと

感心のゝゝ一ツ二ツをいゝゝゝ

八犬士のうち着安ゝ信乃ゝゝゝ先里見ゝ始て佐安ゝ

べゝくゝゝゝものゝゝゝ自家の犬士の内ゝゝゝかゝゝれゝ

ゝ才一書ゝ里見公ゝ見参ゝゝ

親系傳文界
一番ヨ安房ヘ
入北ヘ里見攻の
見ヨ入れ
ヨの解後悔ヘ
分明ヘ低者二頭
の用ヘヨあ
ヘ所ハ結局大
国田まヘ
自ヘ
ヘの評ハ後
後ヘ

言ハ素ハ多く肝文とゐへく語すること筆あまれり
親系の事ハ定め低者の源さ立あんとハ推せしとくとハ見ひ
めを知らして再三熟読のかなし感心〳〵
里見老候と親系と老若のとりつかせもおりゐし
こゝらもよくんを用られるものかなかいもなし
事おわられとそハ後悔お板の時をまちてつまひらよ
いもむ

比志夏用ニ而御ハ伝ハ略語ニ而
言中をふ老夫友情語ニ而赤面ハ一
試ニ而めこかれハ情気語てそれハ急キ徳事ハ

帳も行くそまゝさ上ハ玉ハ若変ハ又
語字も一の方くハ又文義ハ相ハ新又あるねハ
変も出雲ハ者て然ハ推語てそれハとと

桂宮心

著作堂先生〳〵

著作堂云和漢稗史の大筆ハ低者ヨ三箇あり或ハ
勧懲を旨とく且趣向の巧妙なるあり或ハさまゝ勧懲ハ拘
らく趣向を旨とゝるあり或ハ勧懲を旨とせず趣向も巧なる
ねとも雅文章才の筆彼渾妙なるものあり看官先よく
ヨの三箇を分別て低者の志面目を知るヨあるべし其解

十表

當ねりとふ人伯耆の他ぬさちをしを怪りあるとるゝ愚俗ハ
勸懲を旨として左りて後ハ趣向ハ巧あらんと欲し故不且
文よあやつるゝ爰ゝ知音の妙評ハ其の趣向と文をのゝ
評しゝ志の面目を探るを稱し辯言ハ
本輯賊首但馬弼六ゝ応声虫の奇病ゝ年来孕婦の
胎を奪捕て啖ひ積悪あるゝとふ趣向ハ今も逸鄙にて
子を問りくゝの及隨筆茶とゝく隨胎せるものを訓練しゝく
獎善の域へ引のゝんとゝくの旦さるゝ伯耆の用心外の趣向
より格別にまさらゝカを入れて評あゝふ伯耆の志面目を知ると
いひん歟評者の義ハ及ばれねハ飽ぬおちまとゝいひゝ

又里見義成の館山責への辰ハ伯耆特ハ難義の場ゝ義通の
城構ハ登されゝく賊徒ハ責手ゝ及ゝく義成尽ゝ忠孝
射ゝ為さんとせしを法士強ゝハ聽ゝへゝもあまゝ志ゝ辰相
頑智とゝく義実老侯の内ゝあると佯禁あゝふゝ義成
文の問言とゝく立地小怒をなさめ軍をうんせゝふ考るのゝ
情ゝ見ゝ勸懲の第一義伯耆の志面目さゝあり評者ゝ
懲を資げんるゝそねらけれ
その次照文ゝ老侯の使者とゝく瀧田ゝ来ぬるゝ及ゝく
義成初ゝ實への一義を怪るゝおれちまへゝく伯耆一般の

用ゐるまあるまじきものなるべし卿は義成の主の父の門生なりとぞ
かへすがへす犯軍を返せるその詮なく辰相らいつくの罪も
免れがたかるべし俗者は特に難義の怖るるをよくもえ
られざるべしいまだ飽ぬ心地をもつて俊才知音の評まも
かるるべしあり況世のうひなるべの看官はさてあんもも
ひらとるべんも
又娼妓内船宮と号する首のるふるの評の上層まもるべしいを
笑ハ勘徴を肯とそうみ出るる教句なれるるよく力と入れて
細評ってねらひけれ九輯上帙の関目ハまれらるるなり
又素藤ら立身の候ものもの陰徒なるべもも千百人の病尼

を救ひよりう里人を愛敬せるる場報あるべしも亦他者の
ものの面目ものこの候ハ既よりる評ありるれども他者のもの面目
ものるべしといれさるべきハ酌亦注ものの
又八百比丘尼の虚実を正しく古かをしるる用ゐる
べき評の上層まいへり
又鱸目前と守如の自殺のるも看官の意表まの物
へ応るるのよものらは細評なるハあるぬさもちも道節ハ
定正を討ものしるれども これるるよ貫姻人雑目前と良臣
河裡守如の自刃もるれハ獨定正の殺れるるんの官領
方の恥辱ものむの足利の氏の京ものの楠正行よ攻伐れ此

[illegible]氏は辛くも免れんとも[illegible]氏の内室は乱軍中に害
せられしるなりと思ひ合はせ細評をあまりにけれ
さらのこる評は一日ふく或はその文の巧拙をとは
[illegible]ぬさてもさて
[illegible]はいまくあらぬ
くはへは人を待んるを求るは仰くとこかすけれと彼も妙評を
こる評とのこいり都く奥ある紀をさちるへけれは知音は甘へく
憚りとはくをも今をなる紀条右のとく全評迫来まくは
くは紀精妙惜哉他者の志面目は心つ紀なつぬ加は遺漏ある紀を
はまを[illegible]失日の一再評を待するのくあれとく
英仏老[illegible]老[illegible]

吾友鈴木有年云八大伝第九輯十[illegible]巻を見せよ毎回
精妙[illegible]毛野の復讐の段三所の闘戦を終り
[illegible]是同時の[illegible]次第聊[illegible]
三中[illegible]
[illegible]濁歩の大筆[illegible]
[illegible]
又云巻の三第九十七回義実主隠遁の段四家老等退出乃
文句は卒とをうまはらんとひたく席を龍の間に主従[illegible]
頭[illegible]毎[illegible]と[illegible]
義実主従結城を没落し安房へ落る段は神龍を現の

祥瑞あり世かくて安房上総を伐たてらるゝ二国の主なりしかれハ必
ず彼奇瑞を表して龍の国なると唱る生産のあるべきを疑ふ実ハ
功成り名遂て身退く時に及てこの龍の国をかのあるこれ一ハ第一難の
初回神龍升天の照応なり是作者の隠微なるべし且當年の義
実ハ龍の頭とうたうりの所をいふ天下の武将なり登すべきを
表しめ給ふとあり龍の国ハ如此巳の付の所なるこゝをいふけ
龍の衆蛇の頭領なる事実當日龍なるとあるとあるとあるべき衆蛇の
頭なるとあるも作りなるべし一切の文句ハ作りかくのとく深意あり
容易ならず作者の用心と思ふべし是ハ一人といふ事なり事務の折の
暗潭あれも実なり此元高洋あれハ作りかくのとく